

尾畑 留美子著

学校蔵の特別授業

はじめて佐渡に渡った時、島というには大きすぎるスケール感に驚いた。自然界で生息する朱鷺の姿を見た時には心底感動した。

東京で忙しく暮らす僕が休日を取って向かった先は、島にある「日本で一番夕日がきれいな小学校」。その西三川小学校は2010年に廃校となり、4年後、「真野鶴」の老舗蔵元「尾畑酒造」により酒造りの場として再生された。名付けて「学校蔵」。なんともセンチメンタルな響きを持つこの場所が、本書の舞台である。

冒頭を飾る佐渡のカラー写真(撮影・伊藤善行氏)がいい。住人でなければ撮れない島の空気感にじみ出ている。続く学校蔵の描写も実にフィルム的だ。映

一冊のいたがに

画のオープニングのような走りだして読者を迎えてくれる。そして「起立！礼！着席」。チャイムの音とともに教室に響き渡る学級委員の号令。その声の主が、著者で「真野鶴」五代目蔵元の尾畑留美子氏である。著者は、「日本の縮図」と言われる佐渡だからこそ日本の未来を語るにふさわしい、と考えた。授業仕立ての構成で、学級委員として3人の気鋭の識者に地方のあり方を問いかけてい



地方に見いだす確かな希望

く。島で生まれた著者は、東京での生活を経て佐渡にUターンした。戻った頃こそ田舎暮らしに閉口するが、徐々に故郷のかけがえのない魅力に気づいていく。だからだろう、その姿勢は偽善的な地方賛歌ではなく、自然体でしなやかだ。対する3人の識者の視点も実に面白い。著書「里山資本主義」などでお馴染みの藻谷浩介氏(日本総合研

究所主席研究員)は、都会と地方の関係をデータや経験から未来志向で導き出す。論客で知られる同氏の素顔を垣間見るエピソードもファンには嬉しい。他、酒井穂氏(BOLBOP代表取締役CEO)、玄田有史氏(東京大学社会科学研究所教授)との対談から感じたのは、地方に見いだす確かな希望だ。実際に、ここ数年、僕の周

野呂エイシロウ

(放送作家)

■日経BPP社・17

280円